

「夫立ち会い分娩」に関する研究の動向

— 1990年代の国内の看護研究から —

遠藤 恵子・小松 良子*・片桐 千鶴*・三澤 寿美

The Trend of the Studies on Husbands' Childbirth Participation.

— Focusing on Japanese Nursing Studies in 1990-2000 —

Keiko ENDO, Ryoko KOMATSU, Chizu KATAGIRI, Sumi MISAWA

Abstract: The purpose of this study is to review the trend of the Japanese nursing studies on husbands' birth participation in 1990-2000 and to identify the needs for further study. Twenty eight articles on husbands' childbirth participation were analyzed on their purposes, subjects, methods and conclusions. They were classified into four groups ; the attitude of husbands and wives on husbands' childbirth participation before delivery, its impression about after delivery, its influence and the evaluation of its nursing.

The researches were carried out by issuing questionnaires to husbands, wives and couples in the term of pregnancy, delivery, and postpartum. The attitude or the impression of the husbands' childbirth participation was examined with great attention and considered affirmatively. On the other hand the influence of or the evaluation of nursing of the husbands' childbirth participation drew little attention in nursing studies.

For the further study on this matter, we will identify the characteristics of the couples who choose husbands' childbirth participation, its effect on them and the evaluation of nursing, with adequate methods.

Key words: husbands' childbirth participation, midwifery, birth

はじめに

近年少子化がすすみ、我国の出産をとりまく状況は大きく変化した。価値観が多様になり、母児ともに安全な分娩であることはもちろん、産婦や夫婦、家族が主体的に取り組み、満足できる分娩が求められている。その一つの選択肢として、夫立ち会い分娩がある。

日本における夫立ち会い分娩は、1970年代後半から導入されたといわれている¹⁾。夫立ち会い分娩

は、妊娠期から夫婦が互いに協力し、出産への不安、苦痛、恐怖などを乗り越えて感動的な出産体験をし、その後の子育てを相携えて行うための基本的出発点にするという意義をもつといわれている²⁾。しかし、現在実施されている夫立ち会い分娩に対する夫婦の意識や、夫立ち会い分娩の影響は充分明らかにされていない。そこで、国内の夫立ち会い分娩に関する近年の看護研究の動向を明らかにし、夫立ち会い分娩に関する今後の看護に必要な課題を考察した。

研究方法

1. 対象

国内における夫立ち会い分娩に関し系統的に検索した文献を対象とした。

* 山形県立保健医療大学
山形県立保健医療短期大学
〒990-2212 山形市上柳 260 番地
Yamagata Prefectural University of Health Science
Department of Nurse Science
260 Kamiyanagi Yamagata City 990-2212 Japan

1990年から2000年6月までの医学中央雑誌CD-ROM版により検索した。キーワード「夫立ち会い分娩」「立ち会い分娩」では検索できなかったため、「分娩」または「助産学」でヒットした1317件中、タイトルに夫立ち会い分娩に関する用語が含まれている原著論文28件を分析対象とした。

2. 分析方法

分析対象となった文献の研究目的を、KJ法により分類した。4名の研究者がそれぞれ分類し、研究者間で不一致の場合は話し合いにより一致させた。分類されたものを研究の焦点とした。焦点ごとに対象、方法、結果について分析した。

結 果 (Table1-1, 1-2)

1. 年次別論文数

分析対象となった28件を年次別にみると、1994年が4件、1995年が5件、1996年が5件、1997年が3件、1998年が5件と、1994年以降論文数が多くなっていた。

2. 夫立ち会い分娩に関する用語と定義

夫立ち会い分娩に関する用語は、「夫立ち会い分娩」「夫立会い分娩」「同伴分娩」「夫立ち会い出産」「夫参加分娩」「夫の付き添い分娩」「陣痛室立ち会い分娩」「陣痛室付き添い」「夫立ち会い分娩」があった。

夫立ち会い分娩について用語の定義を示しているものは5件のみであった。定義の中で夫が妻に付添う時期を、「陣痛室、分娩室で」^{X)}、「夫が施設に来てから陣痛室、分娩室で」^{M)}と、分娩室におけるだけでなく陣痛室も含むものがある一方、「陣痛室から同伴したかどうかにかかわらず妻が分娩台に上がったとき」^{K)}、「産婦が分娩室入室し清潔野作成後」^{A)}と分娩室におけるものだけを夫立ち会い分娩としているものがあり、夫が妻に付添う時期が文献により異なって定義されていた。また分娩室内における夫の位置を示したものは「産婦の枕元」^{T)}だけで他の文献では明記されていなかった。

3. 研究の焦点

研究の焦点は、「夫立ち会い分娩に対する分娩前の意識」「夫立ち会い分娩に対する分娩後の感想」「夫立ち会い分娩による影響」「夫立ち会い分娩に関する看護実践の評価」の4つに分類された。1つの文献で複数の焦点を含むものが多かった。

4. 焦点別の対象、方法と結果

1) 夫立ち会い分娩に対する分娩前の意識

19件の文献が夫立ち会い分娩に対する分娩前の意識に焦点を当てていた。

調査時期と調査対象について、妊娠中に妻を対象に調査したもの3件、夫婦を対象としたもの4件であった。分娩後に分娩前を振り返って妻を対象に調査したもの1件、夫を対象としたもの4件、夫婦を対象としたもの7件であった。分娩後は入院中から産後2年6ヵ月の間に調査されていた。調査方法は、それぞれの研究者が作成し対象者が記入する質問紙で調査していたもの18件、面接で調査したもの1件であった。

結果は、夫立ち会い分娩の希望の有無とその理由、夫立ち会い分娩に向けた準備、分娩時の夫の期待される役割に関するものが多かった。

夫立ち会い分娩を希望する妻の割合は、5割^{B), U)}、3割^{D), Y)}、7割^{T)}と文献により夫立ち会い分娩を希望する妻の割合は異なっていた。一方夫立ち会い分娩を希望する夫の割合は、3割^{B), Y)}、5割^{T), U)}、7割^{S)}と、文献により希望する割合が異なっていた。夫立ち会い分娩に対する妻と夫の希望する割合の比較では、夫も妻も同じ希望の割合^{U), Y)}とするものがある一方、夫より妻の方が希望している^{B), T), V), W)}ものもあった。

夫立ち会い分娩を希望する妻の理由は、「夫婦で体験したい」「安心するから」^{N), O), P), T), W), AA)}が多く、「大変さをわかってほしい」^{W)}という理由もあった。一方、夫の理由は、「妻のすすめ」「妻の希望」^{F), J), N)}であった。希望しない理由は、「夫の都合がつかない」「夫の仕事」^{F), J)}であった。

分娩時における夫に期待される役割については、「そばにいること」「励まし」「身の回りの援助」^{T), U), Y)}であった。

夫立ち会い分娩を決定した群とそうでない群を比較すると、夫の妊娠分娩育児への関心は立ち会い希望群が高く^{Q)}、両群では、対象の特性が異なっていた。

夫立ち会い分娩に対する夫の準備について、「母級学級に参加」^{J)}、「呼吸法の練習」^{S)}「分娩経過の学習、呼吸法」^{Y), AB)}が実施されていた。このような準備は夫より妻の方が積極的に準備していた^{P), AB)}。

Table 1-1 夫立ち会い分娩に関する文献における研究の焦点, 研究方法と結果

	研究の焦点				用語と定義	対象	調査時期	方法	結 果
	分娩前 の意識	分娩後 の感想	影響	看護の 価 値					
A	千賀 悠子 他 (1989)		●		夫婦 ・立ち会い群 76 組 ・非立ち会い群 151 組	産後 (1 ヶ月)	質問紙	・育児, 子どもへの態度, パートナーとの関係を立ち会い群と非立ち会い群と比較 立ち会い群世話する多い	
B	前島美恵子 他 (1990)	●			夫立ち会い分娩 夫婦 68 組	妊娠中 (36 週以降)	質問紙	・立ち会い希望の有無 夫 3 割, 妻 5 割が希望 ・立会いに対するイメージ 夫より妻が具体的	
C	山縣 猛日 他 (1990)	●	●	●	同伴分娩 夫婦 ・同伴群 94 人 ・非同伴群 100 人	産後 (時期不明)	質問紙	・誰が立ち会いを希望したか 妻からの希望 8 割 ・分娩の感想 大変よかった: 妻 9 割, 夫 6 割 ・次回立ち会いの希望 次回希望する 8 割 ・夫の育児, 性生活を同伴群と非同伴群と比較 立ち会い群育児参加多い 性生活両群に差なし	
D	富田 五月 (1992)	●	●		夫立ち会い分娩 妊婦 112 人 立ち会い夫婦 15 組	妊娠中 (時期不明) 産後 (時期不明)	質問紙 面接	・立ち会い希望の有無 希望は 3 割 ・分娩の感想 安心, 子供への責任 ・次回立ち会いの希望 次回 5 割が希望	
E	内藤 直子 (1993)			●	夫立ち会い出産 産婦 21 人 ・立ち会い群 12 人 ・非立ち会い群 8 人	分娩期	測定 参加観察	・リラクゼーション, 分娩所要時間, 出血量を付き添い群と非付き添い群で比較 付き添い群がリラックス 時間, 出血量差なし	
F	井上 理恵 他 (1994)	●	●	●	夫立ち会い分娩 夫婦 ・立ち会い群 51 組 ・非立ち会い群 73 組	産後 (6 ヶ月から 2 年 10 ヶ月)	質問紙	・立ち会い有無別理由 立ち会い群: 自分の意志, 助産婦や妻のすすめ 非立ち会い群: 都合がつかない, いやだ ・次回立ち会い希望 次回立ち会い希望 8 割, 希望しない 1 割 ・家事参加, 育児参加を立ち会い群と非立ち会い群で比較 家事両群に差なし, 育児差なし	
G	久重 和子 他 (1994)		●	●	立ち会い分娩 立ち会い夫婦 16 組 介助した助産婦 16 人	産後 (入院中) 分娩中	質問紙 参加観察	・分娩の感想 夫: 苦しみわかった, 感動, 父親の自覚, 妻への愛情 妻: 安心, 励み ・分娩時の役割 励まし, 汗拭く, マッサージ ・分娩前夫用教材の評価 役立った, 分娩経過の知識が特に	
H	木村 薫 他 (1994)			●	夫立ち会い分娩 父親 ・立ち会い群 34 人 ・非立ち会い群 38 人	産後 (6 ヶ月から 2 年 6 ヶ月)	質問紙	・父親の意識, 育児参加を立ち会い群と非立ち会い群で比較 非立ち会い群, 初回抱いたとき恐いが多い	
I	浜田佳代子 他 (1994)		●		立ち会い分娩 立ち会い夫婦 33 組	産後 (2 ヶ月から 1 年 8 ヶ月)	質問紙	・分娩中の感想 妻: 呼吸法リラックスできない 夫: 呼吸法励ましてできない, 無力感 ・役割不満足の原因 妻: 緊張 夫: 母親学級不参加, 練習不足	
J	田島 朝信 他 (1995)	●	●	●	夫立ち会い分娩 夫婦 ・立ち会い群 53 組 ・非立ち会い群 82 組 助産婦 ・立ち会い介助経験あり群 89 人 ・立ち会い介助経験なし群 16 人	産後 (2 年以内)	質問紙	・立ち会い有無別理由 立ち会い群: 妻の希望, 妻に協力 非立ち会い群: 仕事, いやだ ・立ち会いに向けた準備 母親学級参加 4 割 ・分娩の感想 妻: 心強い, 夫: 感動 ・分娩に対するイメージ, 家事参加, 育児参加, 妻への愛情を立ち会い群と非立ち会い群で比較 立ち会い群: 分娩に対するイメージ肯定的 妻への愛情と育児は両群差なし ・分娩時の問題点 夫の認識薄い, 緊急時の対応, 夫の気分不良	
K	平林真知子 他 (1995)	●	●		夫立ち会い分娩 「陣痛室から同伴したかどうかにかかわらず妻が分娩台に上った時同伴したものの」 立ち会い夫 30 人	産後 (時期不明)	質問紙	・立ち会い決定時期 分娩前 20 人, 入院後 10 人 ・立ち会いに向けた準備 準備した 13 人 ・分娩のショックの内容 苦しみ, 無力感, 出血	
L	中畑ヒロ子 (1995)			●	夫立ち会い分娩 立ち会い 1 例	分娩入院時 から退院	事例報告	・看護実践の評価 満足感を得られるような援助	
M	三隅 順子 他 (1995)			●	夫の付き添い分娩 「夫が施設に来てから陣痛室, 分娩室に妻とともに入り出産後終了するまで側にいること」 夫婦 38 組 ・付き添い群 ・非付き添い群	分娩期	測定 質問紙	・血圧, 脈拍, 不安, 産痛を付き添い群と非付き添い群で比較 両群差なし ・分娩中の夫の血圧, 不安の状況 不安上昇	
N	小出 晴美 他 (1995)	●	●	●	立ち会い分娩 立ち会い夫 91 人	産後 (直後から 2 年 6 ヶ月)	質問紙	・立ち会い希望理由 二人で体験, 妻のすすめ ・次回立ち会い希望 8 割 ・分娩前後の夫の家事の比較 家事参加増えた ・分娩前教育前後の意識の変化 母親学級後分娩に対する意識家事変化なし 父親の自覚高くなる	

Table 1-2 夫立ち会い分娩に関する文献における研究の焦点, 研究方法と結果

	研究の焦点			用語と定義	対象	調査時期	方法	結果
	分娩前 の意識	分娩後 の感想	影響 の程度					
O 阿蘇のり子 他 (1996)	●	●		夫立ち会い分娩	立ち会い夫婦 44 組	産後 (時期不明)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望理由 夫: 傍にいる, 妻の希望 妻: 安心, 二人で体験 分娩の感想 夫: 感動, 妻: 安心 分娩時の役割 夫: マッサージ, 呼吸法 妻: 傍にいる, 呼吸法
P 杉山 明子 他 (1996)	●	●	●	立ち会い分娩	立ち会い夫婦 51 組	産後 (入院中)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望理由 夫: 妻に協力, 妻: 安心, 二人で体験 立ち会いに向けた準備 妻は夫より積極的 分娩の感想 夫: 感動, 安心, 父親の自覚 妻: 安心, 二人で体験 分娩時困ったこと 何をしたらよいかわからない 分娩前教育の評価 母親学級, 呼吸法有効 陣痛室での指導の評価 陣痛室の指導有効
Q 大西アヤ子 他 (1996)	●			夫立ち会い分娩	妊婦 ・希望群 100 人 ・非希望群 100 人	妊娠中 (25 週以降)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 分娩のイメージ 両群に差なし 夫の分娩育児への関心 希望群は関心高い 誰が立ち会いを希望したか 希望群は夫婦で決定 立ち会い決定時期 両群 20 週前に決定 決定後の気持ち 希望群は安心
R 二藤 尚子 他 (1996)	●	●		夫立ち会い分娩	立ち会い夫 15 人	産後 (2, 3 日)	面接	<ul style="list-style-type: none"> 誰が立ち会いを希望したか 妻の希望多い 変化への影響要因 母親学級受講, 役割認識不足
S 佐藤 明美 他 (1996)	●	●		陣痛室夫立ち 会い分娩	立ち会い夫 26 人	産後 (入院中)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 希望 7 割, 希望しない 1 割 立ち会いに向けた準備 呼吸法, 本を読む 分娩の感想 よかった 100%
T 喜多村道代 他 (1997)	●	●		夫立ち会い分娩 「分娩時産婦の 枕元に付添うもの」	立ち会い夫婦 82 組	産後 (2 年 6 ヶ月 まで)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 妻 7 割, 夫 5 割が希望 立ち会い希望理由 二人で体験したい 分娩時夫の役割 そばにいる, 援助する 分娩の感想 妻: 心強い 夫: 感動, 何するかわからない 夫に否定的感想多い
U 吉田 千秋 他 (1997)	●			夫立ち会い分娩	夫婦 66 組	妊娠中 (時期不明)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 妻, 夫とも 5 割が希望 立ち会いのイメージ 感動, 安心, 父親の自覚 分娩時夫の役割 妻: 励まし, マッサージ 夫: 励まし, 身回り援助
V 草薙 益恵 他 (1997)	●	●		夫立ち会い出産	妊婦 14 人 立ち会い夫婦 4 組 助産婦	妊娠中 (時期不明) 分娩中 産後 7 日目	質問紙 観察面 接	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 妻が夫より希望 立ち会いのイメージ 二人で体験, はずかしい, うっとおしい 分娩の感想 二人で体験, 安心感
W 鈴木 幸子 他 (1998)	●	●		夫立ち会い出産	夫婦 76 組 立ち会い夫婦 8 組	妊娠中 (中期) 産後 (入院中)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 妻が夫より希望している 立ち会い希望の理由 二人で体験, 安心, 大変さをわかってほしい 分娩の感想 安心, 感動 分娩時の役割 励ます, 手を握る, マッサージ
X 外山 理恵 他 (1998)		●		夫立ち会い分娩 「夫が陣痛室分 娩室で妻に付添 う事」	立ち会い夫婦 52 人	産後 (6 ヶ月から 1 年 6 ヶ月)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 分娩中の感想 夫: がんばれば, 不安 役割の満足度 夫: 励ます, 手を握る, 2 割役割達成に 不満
Y 森田 健一 他 (1998)	●			夫立ち会い分娩	夫婦 96 組	妊娠中 (22 週以降)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い希望の有無 妻夫ともに希望は 3 割 立ち会い中の夫の役割 妻: 激励, マッサージ, 傍にいる 夫: 激励, 身の回りの世話 準備 妻: 分娩経過の学習, 母親学級受講 夫: マッサージ, 呼吸法
Z 大庭みや子 他 (1998)			●	立ち会い分娩	夫婦 ・立ち会い群 50 組 ・非立ち会い群数 不明	産後 (直後から 2 ヶ月)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 育児参加を立ち会い群と非立ち会い群で比較 差なし
AA 池田すみ枝 他 (1998)	●	●		陣痛室付き添い 夫立ち会い分娩 「産婦が分娩室 入室し清潔野作 成後夫が入室」	褥婦 99 人	産後 (入院中)	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会い有無の理由 二人で体験, 不安軽減, 夫婦の絆 役割 夫: 励まし, マッサージ, 食事介助 妻: 励まし, マッサージ, 呼吸法 困ったこと 夫: することわからない, 疲労
AB 白木理恵子 他 (1999)	●	●	●	夫参加分娩	立ち会い夫婦 50 組	分娩当日	質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 立ち会いに向けた準備 分娩経過の知識, 呼吸法, マッサージ 分娩中の感想 安心, 夫婦の絆, 夫: することわからない, 感謝 役割 マッサージ, 励ます, 呼吸法, 汗拭 夫が実施した認識より妻が受けた認識 高い 分娩前教育の評価 夫 8 割妻 9 割役に立った心構え, 知識有効

2) 夫立ち会い分娩に対する分娩後の感想

18 件が夫立ち会い分娩に対する分娩後の感想に焦点をあてていた。

調査対象は、夫立ち会い分娩をした夫婦 14 件、夫 4 件、調査時期は、分娩直後から 2 年 10 ヶ月の間であった。調査方法は、それぞれの研究者が作成し対象者が記入する質問紙で調査したものの 13 件、面接 2 件、2 件は質問紙と参加観察法を用いていた。

結果は、分娩の感想、次回の夫立ち会い分娩希望の有無、分娩時の役割に関するものが多かった。

夫立ち会い分娩に対する妻の感想は、「大変よかった」「安心できた」「感動した」「父親の自覚が高まった」「励みになった」「夫婦の絆が強まった」^{C, D, G, J, O, P, S, T, V, W, AB)} と夫立ち会い分娩に対し、妻にも夫にも肯定的な感想が多く見られた。一方「何をしたらよいかわからない」「不安」「疲労」「無力感」「出血にショック」^{K, X, AA, AB)}、「夫の 2 割が役割達成感に不満」^{X)} というように妻より夫に否定的な感情が多くみられた。

次回の分娩に対する夫立ち会い分娩の希望は、「8 割」^{C, N)}、「5 割」^{D)} であり、夫立ち会い分娩を経験した人すべてがもう 1 回経験したいとは思っていなかった。

妻が夫から受けたと認識した役割は、「励まし」「マッサージ」「呼吸法」「そばにいること」「手を握る」^{G, W, AA, AB)} が挙げられていた。「夫が援助を実施したという認識より妻が援助を受けた認識のほうが高い」^{AB)} と妻が夫から援助してもらったと感じても夫は何もできなかったと感じているというように妻と夫でずれがあるものもあった。

3) 夫立ち会い分娩による影響

9 件の文献が夫立ち会い分娩による影響について焦点をあてていた。

調査時期と調査対象は、分娩中産婦を対象にしたもの 1 件、妻と夫両方を対象にしたもの 1 件、産後夫を対象にしたもの 2 件、夫婦を対象にしたもの 5 件であった。調査方法について、分娩中はバイタルサインズの測定や参加観察による調査、さらに標準化された質問紙で調査されていた。産後は、それぞれの研究者が作成し対象者が記入する質問紙で調査されていた。

結果は、分娩中の産婦の状態を夫立ち会い分娩群と非立ち会い群での比較、分娩中の夫の状態、産後の夫の態度を夫立ち会い群と非立ち会い群での比較であった。

分娩中の夫立ち会い分娩の産婦への影響について、21 例の産婦を対象に、分娩時の産婦のリラクゼーションを相対心拍数により分析し夫立ち会い群と非立ち会い群で比較したところ、子宮収縮弛緩期の心拍変動周期的凹凸の極小レベルが非立ち会い群より有意に低く^{E)}、夫立ち会い分娩は分娩第 I 期、II 期において産婦のリラクゼーションに有効であった。しかし分娩所要時間や分娩時総出血量は両群に差はなかった^{E)}。一方、分娩中の産婦の不安を STAI(State-Trait Anxiety Inventory)、産痛の強度を MS(0-100 Numeric Scale)、産痛の質を MPQ(McGill Pain Questionnaire)、産痛の客観的評価である産痛スコア、血圧、脈拍により調査したところ、不安、産痛、血圧、脈拍のいずれも立ち会い群と非立ち会い群で差がなく^{M)}、夫立ち会い分娩は産婦の不安の軽減には効果がなかった。また、夫立ち会い分娩の希望があったにもかかわらずかなえられなかった産婦の極期の不安と産痛が強かった^{M)}。立ち会い分娩中の夫の状態は、不安、脈拍数、血圧の測定から、産婦と同様に不安が強くなっていた^{M)}。

産後の生活への影響を立ち会い群、非立ち会い群で比較したところ、立ち会い群の方が育児参加多い^{A, C)}「家事参加増えた」^{N)} と、夫立ち会い分娩が夫の育児や家事参加に肯定的に影響している一方、「夫立ち会い群とそうでない群で育児参加に差はなし」^{F, J, Z)}「性生活に差なし」^{C)} と、夫立ち会い分娩は分娩後の夫の態度に影響しないというものもあった。

4) 夫立ち会い分娩に関する看護実践の評価

6 件の文献が夫立ち会い分娩に関する看護実践の評価に焦点をあてていた。

研究対象は、夫立ち会い分娩を経験した夫婦を対象としたもの 3 件、夫のみ 1 件、助産婦 1 件であり、調査時期は、分娩直後から 2 年 6 ヶ月までであった。調査方法はそれぞれの研究者が作成し対象者が記入する質問紙で調査されたものが 5 件で、対象者の主観で評価されていた。1 件は 1 事例を対象とした事例研究であった。

結果は、分娩前教育の評価、分娩時の看護者の態度についての評価、分娩時から産褥期にかけて看護実践の評価、助産婦の夫立ち会い分娩についての評価であった。

「分娩前教育に用いたパンフレットは特に分娩経過の記載が有効」⁶⁾「分娩前に行われる両親学級は特に分娩に対する心構えや知識が有効」^{A,B)}「分娩前に両親学級、入院時陣痛室で頻回に指導と充分説明が有効」^{P)}と夫立ち会い分娩に対する分娩前や分娩第1期に十分な情報提供は有効な看護であった。一方、「夫から分娩中何をすべきかもっと知りたい」^{A,B)}と今後の課題も見られた。夫立ち会い分娩の助産婦の評価は「緊急時の対応、夫が気分不良を訴えたときの対応が問題点」⁷⁾としていた。また「分娩開始初期は夫婦ともに分娩に対し消極的否定的感情をもっていたが、夫婦が主体的になるようにかかわることで意識の変容が見られた」^{L)}と継続して関わる重要性を事例研究から示された。

考 察

夫立ち会い分娩に関する文献は、1994年ごろから増加していた。夫立ち会い分娩を実施している施設数や全分娩中の夫立ち会い分娩数の正確な報告はないが、これは夫立ち会い分娩が普及してきていることの反映かもしれない。

妊娠中の夫立ち会い分娩に対する意識に焦点をあてた文献数は多く、夫立ち会い分娩に対する希望の有無や希望の理由、分娩時の夫の役割やその準備について研究されていた。

妊娠中の夫立ち会い分娩の希望は、夫も妻も3割から7割と希望の有無はおおよそ半々であり、夫立ち会い分娩を希望しない夫婦は少なくなかった。夫立ち会い分娩に対して妻の方が夫より積極的に希望していた。また、夫立ち会い分娩を希望する理由は、妻が「夫婦で体験したい」「分娩時安心したい」という一方、夫は妻のすすめに従うというように妻の理由に比べると消極的であった。このことから、妊娠中の夫立ち会い分娩に対する意識は、妻と夫で異なっていると考えられる。また夫は妻のすすめにより立ち会い分娩を希望したり、妻の希望しない理由が夫の仕事の都合であることから、妻や夫が夫立ち会い分娩の参加の有無を本意ながら決定していることも考えられる。

有森³⁾は、妊婦の出産に関する自己決定には出産への関心、知識、年齢が影響を及ぼすことを明らかにしている。また Palkovitz⁴⁾ は、男性が分娩に立ち会うという決定には、妻、友人、医療者、家族、生まれる子供等、社会関係のなかで動機づけられるとしている。妻と夫がカップルとしてどのような過程で夫立ち会い分娩を決定していくのか、その決定のプロセスに影響する因子は何かを今後さらに明らかにする必要がある。

夫立ち会い分娩を希望する理由は、「夫婦で体験したい」「分娩時安心したい」と、夫婦の協力や分娩時の不安や苦痛の軽減というこれまでいわれている夫立ち会い分娩の意義と一致していた。夫立ち会い分娩に対する期待がかない満足できる分娩になるような看護援助が必要と考える。

夫立ち会い分娩に対する分娩後の感想に焦点をあてた文献も多かった。

夫は、妻に比べ夫立ち会い分娩に対し否定的な感想を持つものが多かった。その理由は「何をしたらよいかわからない」「無力感」というように役割に関するものであった。Fishbein⁵⁾は妻が期待する役割と夫のものにずれがあると、夫が不安状態となると報告している。具体的にどのような場面で、そのような否定的感情をもったのか、また分娩前にどのような役割を期待したりその役割に対する準備をしていたのか等今後明らかにする必要がある。

妻はほとんどが肯定的な感想を持っていながらも、次回も夫立ち会い分娩を経験したいというものは5割から8割であった。なぜ希望しないのかも明らかにする必要がある。

分娩中の妻や夫に対し、夫立ち会い分娩の与える影響に関する文献は2件だけであった。1件は夫立ち会い分娩が産婦のリラクゼーションに有効とし、他の1件は産婦の不安の軽減に効果がないというように結果が相反していた。夫立ち会い分娩の意義には、出産の不安や苦痛を乗り越え感動的な出産体験をすることとあるが、分娩時本当に夫立ち会い分娩が産婦や夫によい影響を与えているのかは充分明らかになっていなかった。また夫の不安や苦痛についての研究は1件しかなかった。今後この種の研究を積み重ね、夫立ち会い分娩の分娩中の妻や夫への影響を明らかにする必要がある。

夫立ち会い分娩の産後の育児への影響を調査したものは分娩中に比べると多く、育児参加、家事参加、性生活への影響をみていたが、育児参加や家事参加に影響のあるとするもの、ないというものが相反していた。男性は妻の妊娠分娩をとおり、父親という新しい役割を獲得する。この新しい役割に適応するためには、家族背景、夫婦関係、出産体験等の多くの影響要因があるといわれている⁶⁾。今回対象となった文献における対象である夫について属性の記述はほとんどなかった。妻の妊娠以前、あるいは妊娠中からの家族背景や夫婦関係との関連も含めた検討が必要と考えられる。

夫立ち会い分娩に関する看護実践の評価に関する文献数は少なかった。内容は分娩前教育に関するものが多く、それに対しては概ね肯定的な評価であった。しかしその調査方法は対象者の主観的な評価のみで、客観的手法は用いられていなかった。夫立ち会い分娩を実施するまでには、分娩前教育、分娩時の看護援助、産後の分娩体験の振り返り等多くの看護援助が実施されている。看護の評価研究には、そこで行われた看護援助がどのようなものであったかを明確に示すこと、実施した看護援助ともたらされた変化を関連づけて観察すること、測定指標の明確化、援助技術がもたらした効果を科学的根拠に基づき明確に説明できることが必要で、さらに看護の効果を測定する指標は主観的な指標とあわせ、信頼性の高い客観的な測定のできる測定用具が必要としている⁷⁾。また看護援助について示す内容として、対象の特性、状況の設定、介入の特性が挙げられている⁸⁾。今後は、一事例ごとに、このような内容を詳細に記述しながら、夫立ち会い分娩に関する看護援助の評価をしていく必要がある。

近年、Evidence-based Medicine (EBM) や Evidence-based Nursing (EBN) が提唱されている。EBN とは、入手可能な範囲で最も信頼できる根拠を把握した上で、個々の患者に特有の臨床状況と患者の価値観を考慮した医療を行うための一連の行動指針であるとしている⁹⁾。この概念と行動指針を看護の分野に応用し、EBN、つまり科学的根拠に基づいた看護実践の重要性がいわれている。今回対象とした多くの文献では、夫が妻に付添う時期の定義が不明であり、定義しているものでも陣痛室から付添うもの、分娩室入室後に付添うものなど時期の

定義が異なっていた。分娩は分娩第1期が時間も長くもつともつらいといわれているが、この時期を付添うのかそうでないのかでは夫立ち会い分娩における夫の付添う意味は異なると考えられる。また夫の分娩室内での位置についても、明確に記述していた文献は1件しかなかった。夫のいる位置によっても夫立ち会い分娩における夫の付添う意味は異なることが考えられる。実際の臨床場面では厳密にコントロールすることは非常に困難であろうが、夫立ち会い分娩でも、どのような分娩がもっとも夫婦にとって意義のある分娩となるのかを明らかにする必要がある。またそのためには、対象の無作為抽出、交絡因子やバイアスの削除、分娩前から分娩後までの断片的な追跡など研究方法の吟味が必要である。夫立ち会い分娩には、どのような意義があるのか、その意義はどのような対象にどのような夫立ち会い分娩に関する看護援助をすともっともその意義が発揮されるのか一つ一つ検証していきたい。

おわりに

近年の夫立ち会い分娩に関する文献の内容は、妊娠中、分娩時、産後に、夫と妻を対象に調査され、分娩前の意識、分娩後の感想、夫立ち会い分娩が分娩や産後に及ぼす影響、看護実践の評価と多岐にわたっていた。妊娠分娩産褥は正常な経過であるが、新しい家族を迎えることから夫婦の生活に大きな変化を与える。このような変化に適応するためには満足できる分娩体験が必要である。夫立ち会い分娩は感動的な出産体験をし、その後の子育ての出発点という意義をもつといわれている。すべての夫婦にとって夫立ち会い分娩が満足のいく分娩体験となり、その後の新しい生活により影響となるような看護援助が実践できるために、適切な研究方法を用い一つ一つ検証していく必要がある。

文 献

- A) 千賀悠子, 堀口貞夫他: 周産期ケアと両親教育に関する研究—夫立ち会い分娩の経験別にみた育児への関わりについて (1), 日本総合愛育研究所紀要 25, 109-117, 1989
- B) 前島美恵子, 名取公子他: 分娩を間近に控えた夫婦の「夫立ち会い分娩」に関する意識調査,

- 山梨中央病院年報 17, 41-44, 1990
- C) 山縣猛日, 倉井孝子他: 同伴分娩が父性および夫婦関係に及ぼす影響, 周産期医学 20(8), 117-120, 1990
- D) 富田五月, 石若令江他: 当院における夫立ち会い分娩の現状と課題, 旭川赤十字病院医学雑誌 6, 93-94, 1992
- E) 内藤直子, 吉岡隆之, 藤田弘子: 「夫立ち会い出産」の産婦のリラクセスと相対心拍レベルに関する研究, 大阪市立大学生生活科学部紀要 41, 223-231, 1993
- F) 井上理恵, 深山香代子: 夫立ち会い分娩が家事・育児行動に及ぼす影響, 日本看護学会 25 回集録母性看護, 27-30, 1994
- G) 久重和子, 岡本加代子他: 夫立ち会い分娩のための夫向けパンフレットの効果, 日本看護学会 25 回集録母性看護, 24-26, 1994
- H) 木村薫, 白井やよい, 中村マリ: 夫立ち会い分娩についての意識調査(第3報)—父親の育児参加と意識—, 日本看護学会 25 回集録母性看護, 21-23, 1994
- I) 浜田佳代子, 本多あんり, 岩原世子: 夫立ち会い分娩における出産準備教育の在り方—自主的な役割行動を阻害する要因—, 日本看護学会 25 回集録母性看護, 18-20, 1994
- J) 田島朝信, 和田京子: 夫立ち会い分娩がもたらす精神的影響, 母性衛生 36(1), 131-140, 1995
- K) 平林真知子, 小松よし子他: 夫立ち会い分娩時に夫が受けるショックの内容とその誘因の分析, 日本看護学会 26 回集録母性看護, 23-25, 1995
- L) 中畑ヒロ子: 分娩に立ち会うことに積極的でなかった夫への援助をふり返る, 助産婦雑誌 49(7), 601-607, 1995
- M) 三隅順子, 前原澄子: 産婦の不安を軽減するための看護の方法に関する研究—夫の付き添い分娩の効果からみて—, 母性衛生 36(2), 328-336, 1995
- N) 小出晴美, 荒木佳子他: 倉敷中央病院の両親学級・立ち会い分娩の実際と夫の意識変化, 助産婦雑誌 49(7), 564-569, 1995
- O) 阿蘇のり子, 福多彩子: 夫立ち会い分娩における意識調査, 弘前市立病院医誌 5, 64-71, 1996
- P) 杉山明子, 神谷江伊子他: 「立ち会い分娩における夫婦の認識とニーズ」第2報—立ち会い分娩を行った夫婦へのアンケート調査—, トヨタ医報 6, 101-110, 1996
- Q) 大西アヤ子, 谷川安子他: 夫立ち会い分娩をしない夫婦の意識, 日本看護学会 27 回集録母性看護, 38-41, 1996
- R) 二藤尚子, 永田幸子: 夫立ち会い分娩における分娩前後の夫の心理の変化, 日本看護学会 27 回集録母性看護, 35-37, 1996
- S) 佐藤明美, 田中寿賀子他: 陣痛室立ち会い分娩後の夫の気持ちの変化, 日本看護学会 27 回集録母性看護, 32-34, 1996
- T) 喜多村道代, 三宅恵美子他: 夫立ち会い分娩を試みて—援助の振り返りと今後の課題—, 福山医学 7, 109-114, 1997
- U) 吉田千秋, 軽部敬子他: 当院における「夫立ち会い分娩」についての意識調査に関する検討, 山形県立病院医学雑誌 31(2), 211-215, 1997
- V) 草薙益恵, 木下ひろ子他: 夫立ち会い出産の効果についての再検討—夫婦と医療者間の相互理解を深めるために—, 聖マリアンナ医学研究所医学研究業報 74, 58-65, 1997
- W) 鈴木幸子, 近藤智賀子, 中山真里子: 夫立ち会い出産に関する意識調査—現状を振り返って—, 袋井市民病院研究誌 7(1), 158-166, 1998
- X) 外山理恵, 野田唯未他: 当院における夫立ち会い分娩の現状把握—夫への分娩教育の在り方の方向性を模索して—, 岐阜県母性衛生学会雑誌 22, 117-124, 1998
- Y) 森田健一, 岡田由香他: 現代夫婦の夫立ち会い分娩に対する意識について, 愛知母性衛生学会誌 16, 103-110, 1998
- Z) 大庭みや子, 武藤恵理子他: 立ち会い分娩を実施した父親としなかった父親の育児参加の検討, 茨城県母性衛生学会誌 18, 31-33, 1998
- AA) 池田すみ枝, 谷口信江他: 陣痛室付き添い, 夫立ち会い分娩を経験した産婦と夫の意識調査大阪母性衛生学会雑誌 34(1), 77-81, 1998
- AB) 白木理恵子, 下方清恵, 郡嶋泰子: 夫参加分娩における夫婦のとらえ方—夫参加分娩を経験した夫婦へのアンケートより—, 愛知母性衛生学会誌, 1779-85, 1999

引用文献

- 1) 高橋真理: 夫立会い出産の心理的効果, *Perinatal Care* 13 春季増刊, 71-76, 1994
- 2) 関根憲治: 夫立会い分娩, *周産期医学* 21(10), 1543-1545, 1991
- 3) 有森直子: 出産における妊産婦の自己決定, *日本看護科学会誌* 19(2), 33-41, 1999
- 4) Palkovitz R. ; Fathers' Motives for Birth Attendance, *Maternal-Child Nursing Journal* 16(2), 123-129, 1987
- 5) Fishbein GE. : Expectant Father's Stress - Due to the Mother's Expectations?, *Journal of Obstetric Gynecologic, and Neonatal Nursing* Sep./Oct., 325-328, 1984
- 6) 岩田裕子: 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因, *日本看護科学会誌* 18(3), 21-36, 1998
- 7) 岡谷恵子: いま効果研究を考える意義, *インターナショナルナーシングレビュー* 22(3), 6-8, 1999
- 8) Sindani S. Braden JC. : Evaluating Nursing Interventions a theory-driven approach, 63-137, SAGE Publications, 1998
- 9) 福井次矢: EBM の歴史的背景と意義, *EBM 実践ガイド*, 1-6, 医学書院, 1999
— 2000.11.6. 受稿, 2001.2.5. 受理 —

要 約

夫立ち会い分娩に関する看護研究の動向を明らかにし今後の課題を考察するため、1990年から2000年までの夫立ち会い分娩に関する国内の原著論文28件について、研究の焦点、対象、方法、結果を分析した。研究の焦点は「夫立ち会い分娩に対する分娩前の意識」「夫立ち会い分娩に対する分娩後の感想」「夫立ち会い分娩による影響」「夫立ち会い分娩に関する看護実践の評価」に分類された。研究対象は妻、夫、夫婦であり、妊娠中、分娩期、産後に、主に質問紙により調査されていた。夫立ち会い分娩に対する意識や分娩後の感想を焦点とした文献は数が多く、夫立ち会い分娩に対する態度は分娩前後とも概ね肯定的であった。夫立ち会い分娩の妻や夫への影響や、看護実践の評価を焦点とした文献は数が少なかった。今後夫立ち会い分娩をする対象の特性、夫立ち会い分娩の夫や妻、夫婦に与える影響、看護実践の評価を、適切な研究方法を用いて明らかにする必要がある。

キーワード: 夫立ち会い分娩, 助産学, 分娩